

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 17 日現在

機関番号：32510

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24653124

研究課題名(和文)原爆はどのように語られてきたのか - ロスアラモスで問う新たな歴史

研究課題名(英文)The Stories Americans Tell and Hear: The Manhattan Project and the Bombing of Hiroshima

研究代表者

榎本 智子 (Masumoto, Tomoko)

神田外語大学・外国語学部・教授

研究者番号：00337750

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：原爆の歴史をいかに次世代に伝えていくのか、様々な視点から検証した。まず、原爆が製造されたロスアラモスではいかに原爆が語られてきたのかを調査するためロスアラモス研究所の科学者を含む関係者へのインタビューを行った。現地で語られる原爆は科学的偉業であり、原爆投下後よりも試験爆弾成功までに重点を置いている。もう一つの目的の「対話」と次世代への伝え方に関しては、「はだしのゲン」を現地で上映し参加者とのディスカッションを行った。また、現地の学部生の授業でもこのトピックを取り上げてもらい、ディスカッションを行った。その後のフォローアップから、この授業が核兵器に対する認識に変化をもたらしたことが分かった。

研究成果の概要(英文)：Archival and popular media stories about the Manhattan Project highlight scientific and engineering achievements in creating the nuclear weapons tested in New Mexico and deployed over Hiroshima and Nagasaki. Popular histories ignore the effects of the bombs on the people. This research looks at the scientists' point of view when they developed the bomb, and how those at LANL (Los Alamos National Laboratory) think now. This researcher presented an anime version of "Barefoot Gen," well known in Japan, but not in the U.S. Viewers, scientists in Los Alamos, NM, and honors students at the University of New Mexico revealed their widespread ignorance of effects of the bomb, and students expressed shock about the stories they were never told. Through their reactions it became clear that the classic manga, "Barefoot Gen," remains an effective way to reveal the immediate and enduring effects of the atomic bombings.

研究分野：コミュニケーション

キーワード：原爆 ヒロシマ ロスアラモス 記憶

1. 研究開始当初の背景

原爆の製造・投下から70年近くが過ぎ、生存する関係者が減少してきている。この歴史をいかに次世代に伝えていくのか、現在も続けられている核兵器開発について再考する局面にきている。2011年にはマンハッタン計画記念国立公園建設計画が提言され、日本のみならずアメリカ国内でも論争が巻き起こった¹。このような状況の中で、原爆投下に対する日米の受け止め方の違いをさらに深く知るために、原爆製造地であるロスアラモスと最初の爆弾が投下された広島という2つの地に注目することにした。戦後50年に起きたスミソニアン論争では、アメリカの首都ということもあり、退役軍人や政治的な判断が強く影響した。ロスアラモスで原爆論争があるとすれば、科学者の科学の発展の使命と倫理観が関わってくる。次世代にいかに核兵器について伝えていくのかを探るために、まず、原爆開発に携わった科学者、ロスアラモスの関係者の見解を知ること、対話の糸口を見つけていく必要性があった。そして、そこから次世代に伝えていく方法についての研究を模索することが目標となった。

2. 研究の目的

原爆開発の地であるロスアラモスで、マンハッタンプロジェクトがどのように語られてきたのか、科学者や関係者へのインタビューを行い、彼・彼女らの話を聴くことで、その視点を明らかにしていく。人々にとって「場所」が集団的記憶を創造する上で大きな役割を担っていることは歴史や記憶学の分野で認識されている。科学の町であるロスアラモスでは20世紀最大の発明と言われる困難な原爆開発の功績をたたえるミュージアムはあるが、原爆の使用先である「ヒロシマ」は不在である。このロスアラモスという地でのインタビューを「対話」と捉え、「ヒロシマ」を議論の中に組み入れていく。

最終的にはロスアラモスにおいてネットワークを構築し、原爆開発の結果としてのヒロシマの被爆についての語りや展示をすることを目的とした。

3. 研究の方法

インタビューと資料分析が主な方法である。まず、ロスアラモスで関係者へのインタビューを行った。また、マンハッタンプロジェクト記念国立公園を推進している関係者にもインタビューを行った。同時にネットワークを構築し、ヒロシマ・ナガサキに関連する語りや展示をロスアラモスで実現させる準備をした。

被爆関連の資料や被爆についての歴史がどのように伝えられてきたか、文献をもとに

分析する方法をとった。その中で有効だと考えられる方法を、実際にアメリカの大学の協力を得て検証した。

4. 研究成果

原爆の歴史をいかに次世代に伝えていくのか、様々な視点から検証した。まず、原爆が製造されたロスアラモスではどのように原爆が語られてきたのかを調査するためロスアラモス研究所の科学者を含む関係者へのインタビューを行った。協力者はロスアラモス研究所関係者、科学博物館、歴史博物館関係者、原子保存協会関係者などである。

現地で語られる原爆は科学的偉業であり、原爆投下後よりも試験爆弾成功までに重点を置いている。広島・長崎への原爆投下とその後に関する資料は極端なほど少ない。原爆の身体への影響などを調べた資料などはワシントンDCにある別機関で保存されており、原爆製造、実験までがロスアラモス研究所の管轄であり、その使用は政治的判断に委ねられており、使用による影響も特に身体的な影響に関しては明確には周知されていないことがわかった。

核関連の研究はアメリカの英知を結集したものであり、ドイツの原爆開発に競合する目的でマンハッタン計画が開始され、結果的には日本との戦争を終わらせることができたという政府の見解を概ね受け継いでいる。科学者は科学の発展が使命であり、その成果の使用方法は政治家の判断であるという。また、核兵器を開発することで第2次世界大戦以後の大規模な戦争が避けることができている、という言説も確認された。マンハッタン計画は歴史的な偉業であり、そのために作られたロスアラモスの場所としてのアイデンティティ維持のためにも、マンハッタン計画関連の歴史資料を残そうという運動も活発にされている。ロスアラモスにおいてはマンハッタン計画、特にその関係者の栄光的な伝説が強く受け継がれ、原爆の被害に関しては語れることはほぼない。

インタビューにおいて、上級科学研究者は非公式ではあるが新しく入所してくる科学者には原爆の被害の話から科学に対する責任の教訓を伝えているとのことであった。しかし、組織的には何らかの原爆をはじめとする核兵器開発とその影響についてのオリエンテーション的なものはなく、町の歴史とマンハッタン計画の成功物語を描いているビデオを見せるということも行っていた。このビデオにおいてはロスアラモスという町がどのような経緯で国家の偉業を成し遂げる場所として選ばれ、世界中から極秘に集められた若い科学者が困難に立ち向かいながら原爆開発に成功したというものである。ビデオの最後に描かれているのは上空から見たキノコ雲が一瞬映し出された後、ニューヨークで第二次世界大戦終結の勝利に沸く人々の映像で終わる。

¹ 米連邦会議上下院でマンハッタン計画国立公園化の法案は可決された。

歴史博物館の文書記録担当者の協力で、マンハッタン計画関連者のインタビューの原稿を入手し、分析を行った。それと合わせて関係者のインタビューを記録した文献を分析した。戦後も研究を続けた科学者、戦後、研究所を去ったものでは原爆に対する見解に違いがあることがわかった。ドイツが原爆を先に開発することへの恐れから原爆開発に従事した科学者が多いが、開発途中でドイツには製造能力がないことが判明した時点で、製造反対に転じ研究所を去った科学者たちは、原爆開発に異議を唱えている。この原爆開発の最初の動機となっていたナチス・ドイツの核兵器開発を阻止するという目的がなくなったにも関わらず、開発が続けられ使用されたことによって科学者達の意見をさらに複雑にしている。しかし、自分達が原爆製造に関わったことは、戦後に作られた「原爆が100万人の命を救った」という説を取り入れることで、戦時中においては選択肢がなく「後悔」はしていない、という考え方にまとめられる傾向が確認できた。

もう一つの目的の「対話」と次世代への伝え方に関しては、「はだしのゲン」をロスアラモスでマンハッタン計画の関係者が集まったという歴史的由来のある Fuller Lodge で上映した。このコミュニティの人々が何らかの形でロスアラモス研究所の関係者であることから科学者、及びその家族が中心であった。上映後は参加者とのディスカッションを行った。参加者の質問から、原爆投下後の惨状を写真などでも見たことがないことがわかった。

また、原爆が作られたニューメキシコ州で学ぶ若い世代の学生がどのような歴史観を持っているのかを認識し、原爆・核戦争についての共通理解の可能性を探るために、2回にわたりニューメキシコ大学の Honor 's College の授業に参加した。Margo Chavez 教授に協力を仰ぎ、秋学期に開講されていた“Untold Stories”の授業と春学期に開講された“War Cry”の授業でゲスト講演者として授業で原爆を題材にした映画や文学についての話を行い、学生とのディスカッションも行った。その際、学生にエッセイ形式でフィードバックをもらい、分析した。

学生のレポートからは、原爆を落とした「私たち 日本人」という表現が多く見られ、核兵器の実態についての話をする場面では、必ず歴史的認識が大きな影響を及ぼしていることが確認された。その後のフォローアップから、この授業が核兵器に対する認識に変化をもたらしたことが分かった。また、アニメーションという方法が映画の実写版よりも、より想像力を与えることも参加者のコメントからわかった。

ロスアラモスでのネットワークが出来たことで、ロスアラモス歴史協会が2016年の展示を目指し、広島平和記念資料館から資料を借り受け、展示する計画が提案された。

アメリカでは知られていない歴史の視点を多くの人に伝えるという目的から2度にわたりアメリカでの学会発表を行った。そして、今回の研究の集大成として、グローバル・コミュニケーション研究において「戦後70周年、過去との対話を未来へ」の特別号として編集することになった。また、神田外語大学において戦後70周年関連の講演会を行った。

ロスアラモスにおける「ヒロシマ」の展示の可能性、次世代に原爆を伝えるための授業の機会、また、ドキュメンタリー制作の計画、など挑戦的萌芽研究として次につながる研究成果が得ることができた。

研究期間のこの三年間でマンハッタン計画記念国立公園化が具体化され、アメリカ大学で2015年6月13日より開催されている「原爆の凶」を含む原爆展において米国立公園局のジョナサン・ジャビス局長は広島と長崎の被爆資料を常設展示にいたい意向を表明している。科学者の業績のみに焦点をおいてきたロスアラモスがこのような変化にいかに取り組みのか、興味深いところである。今後は、次世代にどのように原爆について伝えていくのか、ということに関して、活動を続けていく予定である。また、博物館や記念公園が記憶の闘争や対話の場所になるという観点から、マンハッタン計画記念国立公園の設立を準備段階から研究の対象としていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学術論文〕(計1件)

榎本智子、Tales of Two Cities: Hiroshima Hiroshima and Los Alamos, and the Collective Memories about the Atomic Bombing Presented in their Principal Museums、グローバル・コミュニケーション研究、2巻、2015、137-158頁

〔学会発表〕(計2件)

榎本智子、 “Barefoot Gen” : the Continued Influence of the Most Significant Anti-nuclear War-Manga Ever Published. Southwest Popular/American Culture Associationにて発表(2015年2月13日)

榎本智子、Japan's Collective Memory of Hiroshima Seen through the Eyes of a Child: The National and Global Impact of Keiji Nakazawa's Graphic Novel. Seventy Years After Hiroshima: Conceptualizing Nuclear Issues in Global Context. The Prince Takamado Japan Center at the University of Albertaにて発表予定(2015年9月18日)

〔その他〕(ゲストスピーカー)

“Atomic Film Festival” Los Alamos
History Museum(2014年2月25日)
University of New Mexico, the Honor's
College: Untold Stories(2014年
8月28日)
University of New Mexico, the Honor's
College: War Cry(2015年2月19
日)

6. 研究組織

(1)研究代表者

榎本 智子(MASUMOTO, Tomoko)

神田外語大学・外国語学部・教授

研究者番号:

00337750